

岡山大教育 杉原 黎子      ○川井 徳子  
 広島大教育 安藤 久子      藤谷 健

目的 被服に付着した油性汚れの洗淨性の経日変化について、汚れの自動酸化との関係から検討した。前報までは、皮脂汚れのモデルとしてラード・牛脂を用いたが、今回は、食物由来の油汚れとして大豆油をとりあげ、ラードと比較した。

方法 大豆油は Wintering 済みのものを、試験布は綿布・ポリエステル (PE) 布を糊抜き・脱脂して用いた。(10×9) cm<sup>2</sup>の試験布1枚に対して、0.1gの油脂を、ベンゼン溶液で滴下して汚染布を作成。これを、40°Cの電気恒温器中に懸垂して所定の期間エイジング後取り出し、ソックスレー脂肪抽出器を用いて、エチルエーテル並びにエタノールで順次抽出して抽出物の重量を測定。エーテル可溶分については、POV・COVを測定。一方、エイジング後の汚染布を、振盪機を用い、40°CのLAS 0.2%溶液で10分間洗淨し、洗淨後の汚染布に残留した油脂を同様に抽出し、洗淨前後の抽出物の重量を比較。

結果 ①ラード汚染布では、エイジング日数に関係なくエーテルでほぼ完全に抽出された。大豆油は、10日まではエーテルで完全に抽出されたが、15日以後はエーテル可溶分は約60%と減少、残り約40%はエタノールで抽出された。②POV・COVは、ラードではエイジング開始直後から増加し、10日目頃最高となった。大豆油は、0~10日の変化は小さく、10~15日で急増した。③ラード汚染布の洗淨性は、綿布で0日>20日、PE布で0日<20日。大豆油は、綿布のエーテル可溶分の洗淨性は0日>20日であったが、エタノール可溶分量は、エイジング20日汚染布で、洗淨後の方がむしろやや増加した。PE布は、エーテル可溶分の洗淨性は0日<20日、エタノール可溶分については綿布とほぼ同傾向。